

# 古代ギリシア周辺世界における英雄伝説の受容

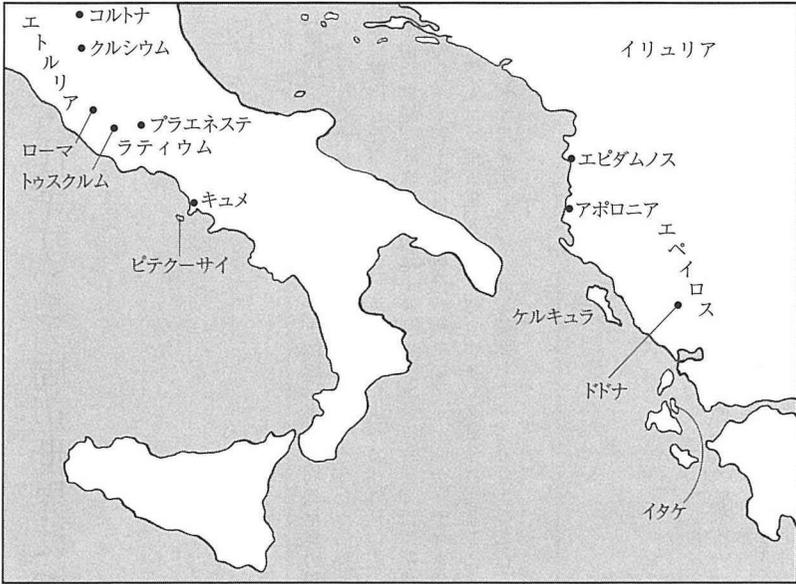
庄子 大亮

【要約】 古代ギリシア人は、英雄伝説によって周辺世界の異民族の起源を説明していた。一方、周辺世界の側でもギリシアの英雄を崇拜していた例が認められる。本稿では、そうした伝説の形成・受容の背景を明らかにした。すなわち、前八世紀以降、周辺世界に進出したギリシア人は、英雄伝説によって、外延に広がる世界を自身の世界認識のなかに秩序づけたのである。そして、前七〜前六世紀、イタリアのエトルリア・ラティウムでは、英雄オデュッセウスの伝説が受容されたが、そこには、ギリシアとの関わりはなかで、王侯貴族が自己の新たなアイデンティティを規定する意味があった。また、ギリシア北西部エペイロス地方のモロッソス王家は、前五世紀後半、ペロポネソス戦争に参加したことを契機に、英雄アキレウスへと起源を遡る伝説によって、ギリシア世界に属すアイデンティティを確認した。こうした受容は、太古にまで遡ってギリシアとの結びつきを強めることとなったのである。

史料 八五巻二号 二〇〇二年三月

## はじめに

古代ギリシア人は、自らの先史を、偉大な「英雄」<sup>①</sup>達の生きた時代と捉えていた。英雄時代、それはすなわち現代の我々がミューケナイ時代（一六―一三世紀）<sup>②</sup>として把握する時代であるが、英雄伝説はその忠実な記憶だったわけではない。伝説から題材を得ているギリシア悲劇を見れば明らかであるように、過去をどう捉えるかということは、当然伝説を語り



I. Malkin, *The Returns of Odysseus*, p. 11の地図より作成

継ぐ同時代の人々の意識と密接に関連していたのである。従来こうした英雄伝説は、ギリシアの特定の共同体との関連でのみ論じられることが多かったが、本稿では、英雄伝説の機能をより広い視野から読み解くことを意図し、ギリシア周辺世界の都市や王家の起源、さらには民族の起源を、トロイア戦争の英雄に帰した伝説に着目する。それはすなわち、八世紀の詩人ホメロスの残した叙事詩に登場する英雄が、のちに異民族の共同体の祖となったとされる伝説であり、しかも実際に異民族によってギリシアの英雄が崇拜されていたことも確認できるのである。

叙事詩『オデュッセイア』は、イタケ島からトロイア遠征軍に加わった智謀の将オデュッセウスが、地中海を放浪しつつ幾多の困難を乗り越え、故郷に帰還するまでを描いた物語であるが、このオデュッセウスは、のちの史料によるとイタリア中部エトルリア・ラティウム地方の住民の祖とされ、また当地の都市創建者として崇拜されていたという。一方、トロイア陥落直前を描いた『イリアス』の主人公で、テッサリアから参戦した最強の英雄アキレウスは、ギリシア北西のエペイロス地方モロソス王家の祖として

崇拜されていたと伝えられる。

古典期（五～四世紀）のギリシア人が、異民族を「バルバロイ」と呼んで蔑視していたことはよく知られている。ギリシア本土と地理的にも遠く離れたイタリアの先住民が、ギリシア人にとってバルバロイであったことはいうまでもなく、地理的にはギリシアへと含まれることもあったエペイロスも、その住民はバルバロイと捉えられていた。ギリシア人が自らの祖先として崇める偉大な英雄が、そうしたバルバロイの祖とされているのは一見奇異に思える。周辺世界と英雄とを関連づける伝説は、いったいどのような意味を持っていたのだろうか。また周辺世界の側がギリシアの英雄を受け容れた背景とは、いかなるものであったのだろうか。⑥ 本稿では、このような問題意識のもとに、エトルリア・ラティウム及びエペイロス地方を中心に、植民時代（七五〇～五五〇年頃）から五世紀までを視野に入れ、考察することとしたい。ギリシア人は、他にも様々な異民族の起源をギリシアの英雄に遡って説明していたけれども、これらの地域は受容を示す史料が比較的豊富であること、そして紙幅の都合からしても、全ての事例を網羅的に検討するわけにはいかないということから、ひとまずこれらの地域に考察を限定しようと思うのである。また以下のような事情もある。さらに時代を下ると、ローマ人はトロイア戦争においてギリシアに敗れたトロイア方の英雄、アイネイアスが建国の祖であると主張していた。アイネイアスの積極的な受容は四世紀頃より始まると推測されているが、こちらのほうはローマ史やラテン文学の立場から膨大な研究の蓄積がある。しかしそれ以前、いかにギリシア人が神話的世界観のもと西方を理解し、ギリシアの英雄がどのように周辺世界に浸透していったのか、そしてそれがどのような影響を及ぼしたのか、といった具体像は明らかにされていない。このギリシア史とローマ史の間の空隙を補う意味でも、本稿では五世紀までを主に扱いたいと考えるのである。

具体的な考察に先立ち、まずは関連する研究を概観し、問題意識をより明確にしておくこととしよう。周辺世界とギリシアの英雄とが関わる伝説が、歴史的事実を反映している解釈したのが、J. Beard である。つまり、ミュケナイ時代すでにギリシア本土とイタリア・シチリアとの間には密な交流があり、一二～九世紀の暗黒時代の間その交流は途絶える

ものの、それは英雄の航海譚や移住として記憶され続けたというのである。<sup>⑧</sup> 同様にエペイロス地方においても、ドドナの神託所においてミケナイ製の奉納物が確認されるように、エペイロスとミケナイ世界とは交流があったことから、N.G.L. Hammond は歴史的記憶を想定している。しかし、エトルリアをミケナイ人が訪れていたという直接的な証拠はなく、L. Peason、J. de La Genière、O. Murray、F. De Polignac のように、伝説の背景に歴史的記憶を見ることに批判的な研究者も多い。<sup>⑩</sup> ただし彼らは、ではなぜこうした伝説が語られたのかという点や、周辺世界における英雄の受容については深く議論していない。

そうした問題に一つの解答を提示しているのが、E.J. Bickerman である。彼は、古典期以降のギリシアの著作家たちがバルパロイの祖先としてギリシアの英雄を与えている多くの例を検討し、ギリシア人は自分たちの神話・伝説を用いて諸民族の先史を探索しようとしたのだとする。そしてさらに論を進め、バルパロイは自身の歴史に無知であったのに対して、体系的に諸民族の先史を探索・理解しようというギリシア人の試みは「科学的」であり、そのような試みを行ったのがギリシア人のみであったから、その説明が権威を持ち、異民族によって受け容れられたのだと主張する。<sup>⑪</sup> Bickerman の見解は多くの研究者に影響を与えており、I. Malkin もこの議論を援用して、異民族による伝説受容をさらに強調した解釈を提示している。彼によれば、ギリシア人が植民活動を開始して異民族と交流をもつようになる八世紀より、英雄たちの放浪の物語が異民族の起源の説明を与え、それが受け容れられて、異民族のエスニシティを形作つたというのである。<sup>⑫</sup>

以上のように関連する先行研究を概観したうえで、問題点を示していこう。まず Berard、Hammond は、こうした伝説がミケナイ時代の歴史的交流を反映しているとするが、確かに、貢納を記録した粘土板文書を除いて文献史料に欠けるミケナイ時代の実態解明に向けては、考古学の成果と文献史料の伝える神話・伝説とを相互補完的に用いることが必要であろう。しかし現時点では、ミケナイ時代の記憶が伝説形成にどのように影響を与えているのかは定かではないし、いずれにせよ全てをミケナイ時代の記憶へと還元してしまうのは単純に過ぎよう。どのような意味を持って語られてい

たかを探ることこそ重要なのである。その点Bickermanは違った観点に立ち、ギリシア人が英雄伝説を用いて異民族の先史を理解・説明したことを強調し、Malinもそれを援用しているのだが、そうした傾向自体がどのような歴史的状況に起因するののかについては明らかにしていない。そこで、この点をまず検討する必要がある。

次に、周辺世界側の受容をめぐるのであるが、ギリシアの英雄がどのような意味を持って受容されたのかということは、Bernard Hammondの視野の範囲外にある。受容に目を向けたBickermanは、ギリシア側の説明こそが権威を持つていたためだというギリシア中心の見方に終始し、またその考察範囲は主に古典期以降に限られ、それ以前については考察していない。Malinも、ギリシアの伝説によって異民族にエスニシティが与えられたというその主張はあまりにギリシア中心であり、ギリシア側の史料を不用意に異民族の伝説受容を示すものとして解釈する傾向が見受けられる<sup>①</sup>。すなわち、以上の見解では、いつ頃、どのような人々が、いかなる意味を見出して受容したのか、という受容する側の能動性が無視され、受容の背景が十分に明らかとされていないのである。

このような先行研究の問題点をふまえた上で、本稿では以下のように議論を進める。まず、こうした伝説が史料上確認され始める時代に、ギリシア人の間でどのような意味を持って語られていたのかを検討し、伝説形成の精神的基盤を明らかにする。続いて、エトルリア・ラティウム及びエペイロスにおける受容の背景を考察し、英雄伝説の機能をギリシアと周辺世界の関係のなかで理解したいと考える。

- ① 英雄の概念と英雄祭祀については、最も基本的な文献としてL.R. Farnell, *Greek Hero Cults and Ideas of Immortality*, Oxford, 1921 が挙げられる。また近年の論文集に R. Hägg (eds.), *Ancient Greek Hero Cult*, Stockholm, 1999 がある。ポリス成立期における英雄祭祀の流行をめぐる、近年活発な議論が展開されているが、その考古学的議論については C. Antonaccio, *An Archaeology of Ancestors*, London, 1995 が詳しい。
- ② 研究文献の発表年を除き、特に表記のない場合、世紀・年号は全て紀元前である。
- ③ Cf. E. Kearns, *The Heroes of Attica*, London, 1989, Ch. 3-6; K. Dowden, *The Uses of Greek Mythology*, London, 1992, Ch. 5.
- ④ ギリシア人は、トロイア戦争が三世紀末―二世紀初め頃に起

のたゞを考へてつたならん。 (Cf. Hdt. 2. 145.) エローペ戦争の史実性  
なるべし。 (Cf. W. Blegen, *Troy and the Trojans*, Lon-  
don, 1963 を挙げてみる。)

⑤ ホメロスの叙事詩の成立時期は、八世紀とするのが最も一般的な見  
解だが、(岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社、一九  
八八年、補論III) 十世紀後半の説がある。 M. L. West, "The Date  
of the *Iliad*", *MH* 52, 1995, pp. 203-19.

⑥ エタリニアのギリシア神話を源にしている論文集に、F. H.  
Massa-Pairault (eds.), *Le mythe grec dans l'Italie antique*, Rome, 1999  
がある。植民時代からローマに至るまでの広範なテーマが論じられて  
いるが、本稿と直接関わる論考は含まれていない。

⑦ E. S. Gruen, *Culture and National Identity in Republican Rome*, New  
York, 1992, Ch. 1 及び小川正廣『エトルキリマム研究』京都大学学  
術出版会、一九九四年、第十章を参照。

⑧ J. Berard, *La colonization grecque de l'Italie méridionale et la Sicile  
dans l'antiquité*, Paris, 1941.

⑨ N. G. L. Hammond, *Epirus*, Oxford, pp. 341-398. (以下 Hammond,  
*Epirus*)

⑩ L. Pearson, "Myth and Archaeology in Italy and Sicily", in: R.  
Kagan (eds.), *Studies in Greek Histories*, New Haven, 1975, pp.  
171-95; J. de Le Genière, "La colonisation grecque en Italie méri-  
donale et en Sicile et l'acclulturation des non-grecs", *RA*, 1978,

pp. 257-76; O. Murray, "Omero e l'etnografia", *Koiklas* 34-35,  
1988-89, pp. 1-17; F. de Polignac, *Cults, Territory, and the Origins  
of the Greek City-state*, Chicago, 1995, p. 97f.

⑪ E. J. Bickerman, "Origines Gentium", *CPh* 47, 1952, pp. 65-81.

⑫ 例として E. Hall, *Inventing the Barbarian*, Oxford, 1989, p. 172.

⑬ I. Malkin, *The Returns of Odysseus*, California, 1998, Ch. 5. (以下  
Malkin, *Returns*) Malkin は A. D. Smith のエトルキリマムに関する  
議論を援用している。(A. D. Smith, *The Ethnic Origin of Nations*, Ox-  
ford, 1986. 邦訳『ネーション・エトニシティ』栗山靖司、高城和義  
他訳、名古屋大学出版会、一九九九年。) Smith は、ネーション形成  
の核となったエスニック共同体をエトニと表現し、このエトニが近代  
以前から存在していたことに着目した。エトニとは、共通出自の神話  
歴史的記憶の共有、集団独自の共通文化、特定の領域との結びつき、  
とらえた属性を持つものと定義される。

⑭ 筆者の批判は、Malkin が Smith のエスニシティについての議論を  
援用する点で自体の当否にはなく、むしろ、他時代、他分野の研究成  
果を積極的に援用してギリシア史研究の新たな可能性を探る姿勢は、  
肯定的に評価されるべきであると考ええる。本稿ではエスニシティを直  
接議論の対象とはしないが、筆者の批判は、Malkin がギリシア側の  
史料を不用意に異民族による受容の史料として解釈しており、受容の  
背景が十分に議論されていない点に注目する。

第一章 植民時代における伝説とギリシア人の世界認識

ギリシアの英雄と周辺世界とを関連づけた最も古い例の一つは、八世紀末のポイオティア地方の詩人、ヘシオドスに見ることができる。『神統記』結末部分において、イタリア先住民の起源が、以下のようにオデュッセウスによって説明されているのである。

「ヒュペリオンの子ヘリオスの娘キルケは、堅忍不拔のオデュッセウスと情愛を交わし、アグリオスと、非の打ちどころがなく正しいラティノスを生んだ。『彼女はまた黄金なすアフロディテの恵みによって、テレゴノスを生んだ。』これらの者たちは、遙か遠くの聖なる島々の奥地で、名高いテウルセノス人ら全てを支配していた。」<sup>①</sup>

「島々」と言及されているけれども、この箇所がイタリアを念頭に置いたものであるということは、次のことから明らかである。まずキルケとは、『オデュッセイア』に登場する女神で、オデュッセウスはアイアイエなる島においてキルケと一年を共に過ごしたとされるが、その島はイタリアのラティウム地方に実在する場所であると考えられていた。<sup>②</sup>そしてラティノスとは、ラティウムの住民であるラテン人の祖のことを意味する。<sup>③</sup>さらにテウルセノス人とはギリシア語でエトルリア人のことを指すのであるが、ラテン人の祖ラティノスと関連づけられているのは、どうやらラティウムに対するエトルリアの影響から、両者が混同されているためらしい。<sup>④</sup>一方アグリオスは、ローマ神話中の神ではないかといった様々な同定がなされているが、どれも確証はない。agriosとは、もともと「野蛮人」という意味なので、イタリアへと渡って沿岸部に植民市を建設していたギリシア人の立場から、より内陸に居住する人々を漠然と象徴したものであるとする Martin の解釈が最も妥当であるように思われる。<sup>⑤</sup> いずれにせよこの部分は、イタリア先住民が明確に区分されないまま、包括的にオデュッセウスへと結びつけられたものであると言える。<sup>⑥</sup>

実は、上に挙げた箇所を含む『神統記』後半部が、ヘシオドスの真作ではなく、のちの時代に挿入されたものであると

いうことは、多くの研究者が一致して認めている。どこからを挿入部と見るかについては諸説があるが、ヘシオドスの最も権威ある注釈者として知られる M.L. West は、九〇一行以下を後代の詩人による挿入と見なしている<sup>⑦</sup>。その根拠はいくつかあるが、本稿と直接関わる箇所では、ヘシオドスを含む当時の本土のギリシア人が、ラテン人やエトルリア人を意識していたことは疑わしいと West は指摘する。すなわち、イタリアでは八世紀中頃に植民市が建設され、エトルリアとの交易が始まるが、この段階ではギリシア本土に住む人々がイタリア先住民を意識することはなく、六世紀後半以降のエトルリアの活発な対外活動に至って、イタリアの諸民族がギリシア本土でも強く意識されるようになったと West は考へ、結末部の挿入をほぼ五四〇—二〇年頃と想定するのである。一方 Malkin は、この箇所がヘシオドスの真作であるとしているが、詩の構造上の問題などもふまえて挿入を論証する West の方が、やはり説得的であろう。さらに Malkin はこの箇所を根拠として、早期にエトルリア人がオアエツセウスを祖先とする伝説を受容したと主張し、エスニック・アイデンティティ形成に結びつけるが<sup>⑧</sup>、こうした系譜は、あくまで当時のギリシア人がそのようにしてイタリア先住民の起源を把握していたというを示すに過ぎず、エトルリア人が伝説を受容し、さらにはエスニシティを規定したという結論を導き出すことはできない。

さて、この『神統記』結末部と密接な関連を持つ作品に、ヘシオドスの名を冠して六世紀後半に集成されたと考えられる『女の系譜』がある。この作品は完全には残されていないが、多数のパピルス断片からその大枠が知られていて、ギリシア全土の諸ポリスと種族の起源に加え、ギリシア以外の諸民族の起源についての神話が網羅されていたようである。異民族の起源を説明したものと、断片一二七番では、ギリシアのアルゴスの血統に属すペロスの子で、征服した土地を自分の名からエジプトと名付けたのだとされる英雄アイギュプトス（すなわちギリシア語でエジプトのこと）<sup>⑨</sup>が言及されている。またペロスの兄弟であるアゲノルの子で、フェニキア人の祖ポイニクス（ギリシア語でフェニキアのこと）は、断片一三八番、一三九番に確認される。アイギュプトスはホメロスでは単なる地名としてしか言及がなく、『イリアス』に登場

するポイニクスはフェニキア人の祖ポイニクスとは同名の別人であることから、異民族の祖として明確に確認されるのは『女の系譜』が最初である。他にも、マグネシア人とマケドニア人（七番）、スキュタイ人（二五〇番）、アラビヤ人（二三七番）、テュノイ人とマリユアンドノイ人（二五七番）など、多くの異民族の祖がギリシアの英雄の系譜へと取り込まれているのである。

このように、異民族の起源をギリシアの英雄に帰した一連の伝説が史料上確認されるのは、六世紀後半のことである。しかしながら、こうした多くの異民族をただ一人の人物が把握し、体系的な系譜を一から創造したとは考えにくく、それ以前になんらかの伝説の原型が存在したと思われる。個々の要素は、ギリシア人が周辺世界の異民族と本格的に交流を持つようになった植民時代にまで遡ると考えるべきであろう。

七五〇年頃から五五〇年頃までのほぼ二百年間に渡り、ギリシア人は、西は南イタリア、シチリアからフランス南岸、スペイン東岸、東方ではエーゲ海北部から黒海沿岸部、南方ではリビアにまで至る地中海一帯に数多くの植民市を建設し、一般にこの二百年間がギリシアの植民時代と呼ばれている。植民市は母市から基本的に独立した共同体であったけれども、母市と共通の祭祀を行い、全ギリシア的な神域とのつながりを強めることにより、ギリシア人のポリスとしてのアイデンティティを維持し続け、ギリシア世界を飛躍的に拡大したのである。植民時代は、こうしたギリシア世界の拡大に伴って、多くの異民族とそれまでよりはるかに密接な交渉を持つようになった時代であった。<sup>⑬</sup> エトルリアに対するギリシア本土の認識度から、Westは『神統記』結末部の挿入を五四〇―五二〇年頃と想定したが、伝説の原型については、それにとらわれる必要はない。母市と植民市を行き来する交易商人などのもたらす情報によって、本土のギリシア人もイタリアについて多少の知識は有していたと考える方が妥当であるし、なにより直接エトルリア人を知っていた植民者や交易商人たちがそういった伝説の形成に関与した可能性があるからである。

それでは、なにゆえに英雄の系譜に異民族が取り込まれたのだろうか。その理由については、地中海世界全体が本来ギ

リシア人の土地であったことを示し、植民を正当化する意図があつたとする見解があり、確かにそのような事例も認められるが、オデュッセウスやアキレウスについては、直接植民市に関連する伝説はなく、植民市建設の正当化を周辺世界と関わる伝説全てに敷衍することはできないであらう。

こうした系譜が語られた背景を理解するには、まず、ポリス社会の民主化のなかで、英雄が共同体全体の象徴とされるようになっていたことをふまえておく必要がある。例えば五世紀のアッティカ悲劇では、伝説上のアテナイ王ケクロプス、エレクテウス、テセウスにちなんで、アテナイ市民団をケクロピダイ、エレクテイダイ、テセイダイなどと呼んでいる箇所が多数あるが、こうした傾向はすでに七世紀中頃のスパルタの詩人テュルタイオスに認められる。彼は、市民全体を英雄ヘラクレスの子孫（ヘラクレイダイ）と見なして「さあ、諸君は無敵のヘラクレスの子孫なのだから、勇気を出すのだ」と呼びかけているのである。こうした共同体の象徴としての英雄概念が、周辺世界にも投影されたのであろう。そして植民時代は、ギリシア人の民族意識が形成される途上であり、特に、蔑視すべきバルバロイを自らに対置した自己意識がまだ顕著に現れていなかったことが重要な要因であつたと思われる。例えば、ホメロスの叙事詩においては、ギリシア人を全体的に指す名称すらまだ確立しておらず、ここではギリシア人の総称として「ダナオイ」、「アカイオイ」といった名前が便宜的に使われていたが、これらはいずれも本来特定の種族を指す語に過ぎない。その後植民時代において周辺世界の諸民族と初めて本格的に接するようになったギリシア人は、同一の言語、宗教、文化を共有する民族としての同胞意識を育み始めるが、それはまだ漠然としたものに過ぎず、しばしば指摘されるごとく、決定的な意識の転換をもたらしたのは五世紀初めのペルシア戦争であつた。ペルシア戦争におけるギリシア諸国の協力と勝利は、ポリスの自由・自治とオリエントの専制君主政という対極的な政治イデオロギー、そしてそれに付随したバルバロイに対する否定的な評価を生み出し、バルバロイを対置した「ギリシア人」という民族意識を確立させるに至つたのである。

周辺世界と英雄とを結びつけた系譜には、このような異民族に対する否定的評価がまだなかつた植民時代の、新しい世

界に対して開かれた意識と、対等の立場で異民族を理解しようというギリシア人の姿勢とを見て取ることができる。それは、ギリシア世界が拡大していくに伴って、諸民族との交流が活発化・恒常化していく中で、外延に広がる新しい世界を自身の世界認識のなかに位置づけようという試みだったと理解するべきであろう。

そして『神統記』終末部において見たように、西方における異民族の共同体の起源を説明するのに大きな役割を果たしているのがトロイア戦争の英雄であるが、その背景には、西方が実際にオデュッセウスやアキレウスの息子が訪れた土地と考えられていたということがある。

八世紀半ば、エウボイア島のカルキスとエレクトリアは共同して、ナポリ湾の北、現在のイスキア島に植民市を建設した。これが西方最初の植民市、ピテクーサイである。以後ギリシア人は本格的に西方へと進出していく。カルキス・エレクトリア人は続いてピテクーサイ対岸のカンパニア地方キュメにも植民し、コリントスも七三三年、イタケ島の北方に位置するケルキュラに植民市を建設、その後エペイロス沿岸にアンブラキア、エピダムノスなどの植民市を築いた。V. Berardは、英雄の漂泊の物語が正確な地理的知識に基づくとして詳細な比定を行ったが、オデュッセウスの故郷イタケ島が航海者たちの寄港地であったことから、こうした植民市とギリシア本土とを往來する航海者たちが、自らの航海を英雄の漂泊に重ね合わせ、想像上の土地を現在の地に同定したという面もあったのであろう。いずれにせよ、ギリシア人が西方を実際に英雄の訪れた地として捉えていたことが、ここでは重要である。トゥキュディデスによれば、オデュッセウスはイタリア半島とシチリアとの間のメッシナ海峡を通過してイタリアに上陸したと考えられていたのであり、女神キルケの住むアイアイエ島が、そのイタリアのラティウム地方に比定されていたのは先に述べた通りである。また、オデュッセウスはエペイロスにも渡ったとされており、ホメロスに少し遅れて成立したトロイア伝説圏の叙事詩群のひとつで、六世紀中頃に成立した『テレゴニア』では、オデュッセウスはエペイロス地方テスプロティスにやってきて、その地の女王カリディケと結婚し、二人の間の子ポリリュポイテスが王国を受け継いだと伝えられる。さらに、こうしたオデュッセウスの物語を

範としてか、同じくトロイア伝説圏の叙事詩群に属す『ノストイ』によれば、アキレウスの息子ネオプトレモスもトロイア戦争後にエペイロスのモロツソスにやってきたとされ、五世紀前半のピンダロスはネオプトレモスがモロツソスを支配していたと伝えている。こうした伝説が、植民時代から流布していたのであろう。またそこには、以下のような事情もあったと思われる。オデュッセウスは全ギリシアで知られた英雄であつたけれども、小国イタケの英雄であり、特定の政治勢力との結びつきを持たなかつた。各ポリスは独自の英雄を崇拜していたし、植民市も植民市創建者を崇拜していたから、そのようなオデュッセウスが周辺世界との媒介役として適していたのだろう。それは、『イリアス』の主人公として非常に有名であるが、その故郷テッサリアは当時ギリシアの中で政治的影響力をもつ地域ではなかつたアキレウスについても当てはまる。外延に広がる新しい世界を、自身の世界認識のなかに位置づけようと試みた植民時代のギリシア人は、自らと異民族との明確な境界を持たぬまま、トロイア戦争の英雄が実際に訪れた土地として西方世界を秩序づけ、『神統記』あるいは『テレゴニア』や『ノストイ』に見られるように、住民を英雄の後裔と捉えたのである。

では、このようなギリシア人の神話的歴史観は、周辺世界の側においてどのように受けとめられたのだろうか。次章からは周辺世界の側に視点を移し、考察を進めていくことにする。

- ① Hes. *Theog.* 1011-1016. 訳文の「一」内は写本によっては欠落してゐる部分である。なお、本稿における史料訳は筆者による訳訳である。
- ② *Theophr. Hist. pl.* 5. 8. 3.
- ③ M. L. West, *Hesiod Theogony*, Oxford, 1966, p. 434. (以下 West, *Theogony*)
- ④ Dion. Hal. 1. 29. 2. Cf. West, *Theogony*, p. 435.
- ⑤ Malkin, *Returns*, p. 185f.
- ⑥ 同様に、後五世紀ローマの文法学者セルウィウスは、ギリシア人が植民市を建設したイタリアのカンパニア地方の先住民、アウソネス人の祖アウンソンをオデュッセウスとキルケの子としてゐる。(Servius *ad. Aen.* 8. 328.)
- ⑦ 挿入と見なす根拠については詳しくは West, *Theogony*, pp. 397-99, 417, 430, 436.
- ⑧ *Ibid.*, p. 435f. 交易活動を拡大させたエトルリアは、ギリシア植民市アラリアと540年に衝突、サルディニア沖で海戦を繰り広げ、エトルリアが勝利した。(Hdt. 1. 166.)
- ⑨ Malkin, *Returns*, Ch. 5.

- ⑩ 『神統記』結末と『女の系譜』冒頭は連関するもので、これらの作者を同一人物とする推定がある。M.L. West, *The Hesiodic Catalogue of Women*, Oxford, 1985, pp. 125-137 (以下 West, *Catalogue*); West, *Theogony*, p. 398f, pp. 432-43. 『女の系譜』のパピルス断片は広範に出土しており、古代において相当に人気があったらしい。古代ギリシア人の系譜への関心については West, *Catalogue*, pp. 1-11, なさび下の断片番号は Merkelbach-West 編の断片集の通り。
- ⑪ Cf. Apollod. 2. 1. 4.
- ⑫ Cf. Apollod. 2. 1. 1.
- ⑬ 植民時代の概説として J. Boardman, *The Greek Overseas* (4th ed.), London, 1999 が最もよく使われる。またギリシマ人と土着住民との交流、文化差を扱った論文集に J.-P. Descoudures (eds.), *Greek Colonists and Native Populations*, Oxford, 1990 を参照。
- ⑭ E. Hall, *op. cit.*, p. 48f. 六世紀半のスパルタの王族ペリクレスは、シチリアのエリュクスはヘラクレスがかつて占領した土地であるからヘラクレスの後裔（すなわちスパルタ人）に帰属すべきであるとして主張し、植民団を率えてエリュクスに向かった。（Hdt. 5. 43）
- ⑮ Ht. 11. (M.L. West, *Tambri et Elegi Graeci*, vol. 1, Oxford, 1971. 以下 DEG)
- ⑯ シシリアとギリシマ全体を指す言葉として「ヘラス」を使う語を用い（Hes. *Op.* 653）、アルキロスは「ハンクレネス」（全ギリシマ人）を使う言葉を用い（Ht. 102IEG）
- ⑰ J. M. Hall, *Ethnic Identity in Greek Antiquity*, Cambridge, 1997, pp. 40-51.
- ⑱ シテクーサイ、キメロイとして J. Boardman, *op. cit.*, pp. 165-69; D. Ridgeway, *The First Western Greeks*, Cambridge, 1992, Ch. 4-6. リンネオスの植民地として J. Boardman, *op. cit.*, pp. 225-29.
- ⑲ Y. Berard, *Dans le Sillage d'Ulysse*, Paris, 1933.
- ⑳ J. B. Salmon, *Wealthy Corinth. A History of the City to 338B.C.*, Oxford, 1984, p. 89.
- ㉑ Thuc. 6. 2. 1, 4, 24, 4. 一世紀の地理学者ストラボンの「カンニン」アトキヤンに於ける多くの地理的記述を参照。Str. 5. 232, 244-5, 247, 255.
- ㉒ これは六篇からなるが、後一世紀頃の文法学者プロクロスに於ける要約の形でしか現存しない。その成立をめぐる詳しい議論は以下で、岡道男、前掲書、第二部参照。なおラクスとは Oxford Classical Text 版で T. W. Allen, *Homeri Opera* V に収めた。
- ㉓ 植民地の建設と宗教については I. Malkin, *Religion and Colonization in Ancient Greece*, Leiden, 1987, Part 2.

## 第二章 エトルリア・ラティウムにおける英雄の受容

### 第一節 エトルリア・ラティウムのギリシア文化受容

本章では、エトルリア・ラティウムにおける英雄の受容を検討するが、それに先立って、まずはギリシア植民市と先住民との関係を概観しておく必要がある。ギリシア植民市と活発な交易を行い、ギリシア文化を最も積極的に導入したエトルリア人について、まず簡単に述べておくこととする。

エトルリア地域の鉄器時代(九―八世紀)は一般にヴィラノーヴァ期と称され、研究者はこの時代を原エトルリアとして認識している。続く七世紀は東方化期と呼ばれるが、それはこの時期ギリシアとの交流により東方の先進文化がエトルリアへもたらされたことに由来し、またこの時期には、各地で神殿の造営、城壁の建設・拡張がなされて都市化が進むとともに、豪華な東方化様式の品を大量に副葬した巨大な墳墓が造られていることからして、王侯貴族層の台頭があったと見られる<sup>①</sup>。エトルリア人の起源をめぐって、こうした東方文化の到来と、エトルリア人は小アジアのリュディアから移民してきたというヘロドトスの記事<sup>②</sup>を根拠に、オリエントから大量の移民団が到来し、エトルリア民族を形成したとするオリエント起源説がかつて唱えられていた。しかし東方化様式は当時の地中海一帯に広まっており、大量移民を示すような遺跡や遺物も発見されておらず、現在ではエトルリア人のオリエント起源説は否定されている。考古学的に見ても、ヴィラノーヴァ期と東方化期の主要地点は連続しているため、次第に民族としての統一性を強めたとする形成説が今では通説となっている<sup>③</sup>。なお、ギリシア人はエトルリア人のことを「テュルセノス」[Tyrsenos]あるいは「テュレノス」[Tyrenos]と呼び、ローマ人は「トウススキ」[Tusci]、「エトルスキ」[Etrusci]と呼んだが、エトルリア人自身は六〇〇年頃から *rasna* という言葉を民族の名称として言葉として使用し始めたらしい<sup>④</sup>。同じ頃エトルリアでは、十二都市国家連合が

結成される。連合に加盟していたと伝えられる都市は一定ではないが、これらの都市国家はウォルシニイに存在した守護神ウォルトウムナの神域において毎年集会を開き、一人の王ないしは連合長官を選出した。<sup>⑤</sup>こうした過程を通じて、エトルリア人は民族としての一体性を強めたのであろう。地中海全域との交易を盛んにしたエトルリアは、六世紀に最盛期を迎えることとなる。<sup>⑥</sup>

ギリシア植民市の建設されたカンパニア地方にも、カプアなど多くの都市を建設していたエトルリア人は、ギリシアとの活発な交流を通じてその文化を吸収した。フェニキアからの影響も無視することはできないが、エトルリアに最も顕著な文化的影響を与えたのは間違いなくギリシアである。<sup>⑦</sup>何よりもまずエトルリア人は、ギリシア文字を七世紀初頭にギリシア植民市キユメから学び、ギリシア語から多数の単語も借用している。<sup>⑧</sup>またエトルリアの各都市国家は最初王政をしき、王権はかなり強大であったが、たいていは五世紀までに共和政を確立する。こうした民主化についてもギリシアの影響が想定されていて、その他、都市建設、美術や工芸の分野でもギリシアの影響は大きい。<sup>⑨</sup>

こうしたギリシア文化の伝播において重要な媒介となったのは、第一に貿易商人であるが、ギリシア人のエトルリアへの移住も確認される。例えば七世紀のコリントスの貴族デマラトスは、祖国を逃れて三人の職人とともにタルクイニアへと移住し、その子のルクモはのちにローマ王となったと伝えられている。<sup>⑩</sup>同じくタルクイニアで出土した七世紀の壺の銘文には、ギリシア人の名がエトルリア語で表記されており、これは帰化したギリシア人の名前であると推測され、ウェイイでも、おそらく居住していたギリシア人が作ったと思われる陶器が発見されている。時代は下るが、五世紀にポプロニアに住んだアッティカの陶工メトロンは、その作品にエトルリア語で「メトロンが作った *metru menece*」と署名しており、おそらくエトルリア語を話すこともできたのであろう。文化の伝播には、このようにエトルリア都市に移住したギリシア人も大きな役割を果たしたと考えられる。

一方、ギリシア人が植民市を建設した頃のラティウムでは、都市化はほとんど進んでおらず、神域の周りに集落が形成

されている程度であった<sup>⑬</sup>。八世紀半ばのギリシア産陶器がラティウムで発見されているものの、イタリヤにおける植民市の交易相手はエトルリアが中心であり、早くにギリシア人がラティウムでも商業活動を行っていたかどうかは定かではない。しかし七世紀には、ラティウムにもエトルリアを通じてギリシアの先進文化がもたらされたことが分かっている。先に触れたデマラトスの子ルクモは、六一六年にタルクイニウス・プリスクスと改名してローマの王位に就き、以後約三〇年間統治したと伝えられるが、発掘の結果、ローマでは七世紀末に排水設備の整備、公共広場の開設、神殿の造営などが行われていることが確認されており、実際にこの時期エトルリアの影響のもとローマは本格的な都市へと発展したのである<sup>⑭</sup>。またローマ南東に位置するプラエネステにおいても、七世紀に入ってから東方化文化の伝播が認められる。「バルベリーニの墓」、並びに「ベルナルディーニの墓」と呼ばれる墳墓から多数の東方化様式の副葬品が出土しており、これらは卓越した経済力を有した王侯貴族の墓であったと推測される。エトルリア沿岸都市がギリシア植民市あるいはギリシア本土と直接的に接触しえたのに対し、プラエネステは内陸部にあつて港を持たなかったことから、東方化文化はエトルリアを通じてもたらされたと考えられ、七世紀のエトルリアープラエネステ間に緊密な文化的・経済的関係が存在したことは間違いない<sup>⑮</sup>。このように、エトルリアを通じてラティウムにもギリシア文化がもたらされていたのである。

以上のようなギリシア文化受容の文脈をふまえたうえで、ギリシアの英雄が、いつ頃、どのようにしてエトルリア・ラティウムに浸透したのかを検討することとしたい。

## 第二節 英雄の伝播

神話・英雄伝説をモチーフとする図像を網羅した *LINC*<sup>⑯</sup> によれば、オデュッセウスを描いたギリシア産の図像のうち、六世紀に生産された陶器が全部で八点ほどエトルリアから出土している（ウルチ四点、クルシウム一点、テュデル一点、その他二点<sup>⑰</sup>）。そのうち最も古いと考えられているのは、クルシウムから出土したクラテル（混酒器）で、その制作年代は五六

○年前後、『イリアス』第二三巻に歌われるパトロクロスの葬礼競技をモチーフにした絵が描かれたものである。産地は確定していないが、オデュッセウスが巨人ポリュペモスの目をオリーブの丸太で貫く場面（第九巻）を描いた「アリストノトスのクラテル」（カエレ出土）はもつと古く、七世紀中頃のものである。その署名のアルファベットがエウポイア系であることから、作者アリストノトスはエウポイア人であることが確実だが、アリストノトスはエトルリアへの移住者であり、このクラテルはエトルリア人の注文に応じて作られたものであるという推測もなされている。<sup>②①</sup>「アリストノトスのクラテル」の産地は確定できないとしても、ほかにエトルリアにおいて製作された図像が壺絵や甲虫石など全部で百数十点ほど確認されていて、エトルリアでオデュッセウスは非常に人気があり、その物語が流布していたことは疑いない。そのうち五世紀以前のものは八点ほど確認されるが、最も古い壺絵はクルシウムから出土したもので、七世紀末にまで遡る。<sup>②②</sup>

さらに、オデュッセウスが早期にエトルリア人の間に伝わっていたことを示す、より確実な証拠が存在する。ギリシア語でもオデュッセウスの表記にはいくつか種類があり、例えばイオニア方言では *Odyseus*、ドリス方言では *Olyteus* と表記する。一方エトルリア語形でもいくつかバリエーションが見られるが、古い形は *Tuse* もしくは *Uituse* であり、これはイオニア方言の *Odyseus* のほうから転移したことが言語学的に確実視されている。エトルリアと交易を行っていたエウポイアとコリントスはそれぞれイオニア系、ドリス系であり、六三〇年代以降はコリントスとの交易のほう盛んになる。これはエウポイアとの交易が盛んであったそれ以前の時代にエトルリア語に取り込まれたと考えられるのである。<sup>②③</sup> これらの証拠から、オデュッセウスが七世紀の間にはすでにエトルリア人の間に広まっていたと考えてよいであろう。先に述べたようなギリシアからの移住者や、こうした美術作品を通じてエトルリア人の間にその物語が浸透したと推測される。Malkin は、叙事詩が伝えられた場としてシュンポシオン（饗宴）を想定しているが、これは興味深い指摘であるといえる。シュンポシオンの席においては詩歌の吟唱が付きものであったことは『オデュッセイア』でも示されており、<sup>②④</sup> シュンポシオンにおいて用いられるクラテルがエトルリアで多数出土していることから、エトルリア人はこの慣習も取り

入れていたと考えられている<sup>②⑥</sup>。もし実際にギリシア人とエトルリア人が一緒にシユンポシオンを行い、その場で詩歌の吟唱が行われたとすれば、太古において両者の世界を連結させるオデュッセウスの物語こそ、ともに関心を持つものであつたらう。第一章で考察したように、ギリシア人はイタリアを神話的世界観のもとに理解していたこと、そしてエトルリア人がオデュッセウスに強い関心を示していたことから、エトルリア人が太古からギリシアと密接な関係を持つという共通意識が醸成される背景が存在していたと言うことができるのである。

### 第三節 受容の背景

第一章において見たように、Malin は『神統記』結末部を根拠として、エトルリア人がオデュッセウスを祖先とする伝説を受け容れ、エスニック・アイデンティティを形成したと主張するが、『神統記』の言及は、あくまで植民時代のギリシア人がそのようにしてイタリア先住民の起源を把握していたことを示すに過ぎず、エトルリア人が伝説を受容し、さらにはエスニシティを規定したという結論をそこから直接導き出すことはできないのであつた。またそれは、本章第一節においてふれた、エトルリア人が民族としての一体性を強めていく過程を無視するものであることから、認めることはできない。では、伝説受容の背景はいかなるものであつたのか、文献史料を中心に検討していくこととする。

まず、エトルリアにおいてオデュッセウスが都市創建者として崇拜されていたと伝える史料から始める。トゥキユデイドスのあとを受け、三九四年のクニドスの海戦までを記録した『ギリシア史』を著した歴史家テオポンポスの断片では、エトルリアの都市コルトナの起源とオデュッセウスの崇拜について、以下のように伝えられている<sup>②⑦</sup>。

「テオポンポスによれば、オデュッセウスはベネロペイアの事を知ると、テウルセニアへ向けて旅立ち、そこにたどり着くとゴルテュニア（コルトナ）を創建してその地で生涯を終え、住民たちによって篤く崇拜されているのだという。」

この記事に伝えられるオデュッセウスの最期は、『テレゴニア』に語られるオデュッセウスの死と矛盾する。『テレゴニ

『ア』では、父を探し求めてイタケへとやってきたテレゴノス（オデュッセウスとキルケの子）が、父の顔を知らぬがゆえに誤ってオデュッセウスを殺してしまったとされており、こちらのほうが一般的な伝えであるから、オデュッセウスがコルトナで死に、そこで崇拜されているというのは、イタリア側の何らかの情報に基づくのであろう。これは、オデュッセウスはイタリアにおいて埋葬されたと伝える同じく四世紀のアリストテレス断片の記述や、オデュッセウスはトロイア戦争後に一旦イタケに帰国したあとイタリアに渡ったとするプルタルコス<sup>③</sup>の証言とも一致する。また三世紀の詩人リュコプロンも、『アレクサンドラ』においてこの伝説を念頭に置き、「彼（オデュッセウス）が死んだら、テュルセニアの丘ベルゲが、ゴルテュニア（コルトナ）においてその灰を受け取るであらう」と歌っている<sup>④</sup>。残念ながらその崇拜の実態は明らかでないが、オデュッセウスが都市の創建者として崇拜を受けていることは、共同体統合の象徴として植民市創建者を崇拜していたギリシア植民市との類似性を示唆する。こうした創建者の崇拜は、母市からの独立性を志向して共同体独自の象徴を必要とするギリシア植民市に広く見られるもので、エトルリアへのギリシア文化の強い影響から考えるに、エトルリアの都市国家でもこうした崇拜が導入されていたと推測するのは強ちの外れではないであろう。さらに同じくエトルリアの都市クルシウムに関して、ウエルギリウスの注釈書で知られる後五世紀ローマの文法学者セルウィウスが、「クルシウムは、マミクス山と近接しているエトルリアの町で、テュレ二人（エトルリア人）クルシウスが、あるいはオデュッセウスの子テレマコスが創建した」と伝えている<sup>⑤</sup>。ここでは二つの説が併記されているが、オデュッセウスを描いたギリシア産の最古の壺絵が発見されているのがこのクルシウムであり、エトルリア産のオデュッセウスを描いた七世紀の壺もクルシウムから出土している<sup>⑥</sup>。セルウィウスの伝える史料はかなりのものだが、このクルシウムは実際に古くからギリシアとのつながりをもつのである。

次にラティウムに関する伝えを見ていこう。まずプルタルコスは、ラティウムの都市プラエネステが、オデュッセウスの息子テレゴノスにより創建されたと伝えている<sup>⑦</sup>。プルタルコスは後一世紀頃の人であるので、この伝説の形成がどこま

で遡るか俄かには判断しがたいところではあるが、このプラエネステが、七世紀にエトルリアとの間に緊密な文化的・経済的關係を築いていたことは先に述べた通りである。さらにローマの南東に位置するトゥスクルムも、テレゴノスが創建したとローマの詩人オウイデウスが伝えており、そのトゥスクルムでは自らをオデユッセウスの子孫と主張する一族が存在したという。以下に挙げるのは、一世紀のハリカルナッソスのディオニシオスが、六世紀末の第七代ローマ王タルクイニウス・スペルプスについて述べた箇所である。<sup>55)</sup>

「タルクイニウスは、権力を正当にはなく武力によって得る者には、土地の者だけではなく外国の兵も必要であると考えて、ラテン人のうちで最も傑出し、最も力を持つ者に娘を娶らせて、友好関係を結びたいと熟望したのである。オクタウィウス・マミリウスという名のその男は、オデユッセウスとキルクの子テレゴノスの末裔で、トゥスクルムに住んでいたのだが、政治において卓越した能力を持ち、また軍事においても優れているとの評判であった。」

一世紀ローマの歴史家リウイウスもこれと全く同様の記事を伝えているうえ、マミリウス家がオデユッセウスの姿を刻印した硬貨（一七〇年頃及び八二―七九年頃のもの）を鑄造していることから、一族が実際にこの伝説を誇りに思っていたことは疑いない。そして Octavins という名はエトルリア系なので、オクタウィウス・マミリウスの出自はおそらくエトルリアである。<sup>56)</sup> タルクイニアのルクモがローマ王となったように、エトルリアの文化的・経済的優位性を基盤として、オクタウィウス・マミリウスはトゥスクルムで権力を得ていたのであろう。ならば、オデユッセウスあるいはその息子が建設したとされるコルトナ、クルシウム、プラエネステ、トゥスクルムは、エトルリアの都市あるいはエトルリアの影響下にあつた都市であるという共通性をもつ。さらにオデユッセウスがエトルリアにやってきてエトルリアで死んだとする一連の伝えが存在すること、そしてオデユッセウスの美術作品に対してエトルリア人が強い関心を示していたことからして、やはりエトルリアにおいてオデユッセウスやその息子がやってきたという伝説が流布し、太古よりギリシアと密接な関係を有するという意識が浸透していたことが示されると言える。ただし、これらはいずれもかなりのちの史料である。オデ

ユッセウスが都市を創建したという伝説や、オデュッセウスの血統を主張する伝説が生まれ普及しえた時期として最も適合的であるのは、いつであらうか。

まず、ラティウムの都市プラエネステ、トウスクルムとオデュッセウスの結びつきは、ローマの台頭以前であらう。一連の伝説にローマが全く関連していないのは、ローマが勢力を拡大し、ラティウムでの影響を強めた四世紀以降では考えにくいことだからである。例えば、実際にローマを訪れて取材を行ったとされる一世紀の歴史家ディオドロスは、ローマの国祖たるアイネイアスの子孫シルウィウスがプラエネステやトウスクルムを含むラテン諸市を建設したと伝えている<sup>⑧</sup>。さらに、ローマは五世紀を通じてウォルスキ、アエクイ、サビニなどラティウム周辺に居住していた諸部族と敵対関係にあり、四世紀に入ってからこれら諸部族を制圧してラティウムの覇権を確立していくことになるのだが、アイネイアスの子孫が建設したとディオドロスが伝える諸市には、ウォルスキ人やアエクイ人、サビニ人の町が含まれており、四世紀以降のローマによるラティウム支配の正当化が如実に反映されている。このような記事と比較すると、ラティウム都市とギリシアの英雄との結びつきは、やはりローマの台頭以前と考えるべきであらう。また、のちにマミリウス家はローマの名門貴族となるが、ローマと関わる英雄でなく、ギリシアの英雄とのつながりを主張しているのは、やはり相当古くからの崇拜と考えるほかないのである。

ではローマの台頭以前として、最も適合的な時期はいつだろうか。七～六世紀にエトルリアの影響下にあつたラティウムのプラエネステ、トウスクルムにおいて、オデュッセウスへの結びつきが見られること、そして前節において検討したように、オデュッセウスをモチーフにした美術作品とオデュッセウスのエトルリア語形から、オデュッセウスへの関心が七世紀半ばより認められることも考え合わせ、エトルリアがギリシア文化受容に積極的であつた七～六世紀が、最も適合すると考える。七世紀は、豪華な副葬品を含む墓の発掘状況から、ギリシアとの通商交易によつて富を蓄積した貴族階級が興隆したことが認められる時期でもある<sup>⑨</sup>。彼らはその政治的・経済的基盤をより強固にするためにも、ギリシアとの結

びつきを強めようとしたのであろう。またパウサニアによれば、六〇〇年前後のいずれかのエトルリア都市国家の王であったアリムネは、「バルバロイのうちで初めてオリュンピアのゼウスに玉座を奉納した」のだという<sup>⑧</sup>。ギリシア全土から人々の訪れる神域であるオリュンピアに奉納するというその行為には、いかにギリシア世界において自己の存在を示すことを望んでいたかが示されている。このような王侯貴族がギリシア世界との関わりのなかでのアイデンティティの確認を求め、ギリシアの英雄を都市の創建者として、あるいは一族の祖として崇拜したのだと推察される。それは、異文化とそれをもたらすギリシア人に接して、新たな世界の広まりのなかでのアイデンティティ規定の必要にせまられたとき、共通の先史において自己の起源を理解し、対等の立場に立とうという欲求のあらわれでもあったと解することができる。また、自己の起源をギリシアの英雄伝説に遡ることは、ギリシア文化の正統な継承者として自己を認識することにつながる。もちろん、エトルリアの住民や都市の起源が全てギリシアの英雄に遡ると考えられていたわけではないが、ギリシアの英雄との直接的なつながりを主張した人々が存在したことは、ギリシア文化がエトルリア・ラティウムに深く浸透した要因の一つとして捉えることができよう。

のちのローマは、独自のアイデンティティを求め、トロイア戦争においてギリシアと戦ったトロイア方の英雄、アイネイアスを国祖に選んだのだと考えられる。しかし逆にいえば、ローマのアイデンティティがギリシアの英雄伝説という枠組みのなかで規定されねばならないほどに、ギリシアの神話的世界観は深く浸透していたのであり、ギリシア文化もまた、ローマへと受け継がれていくのである。

続く最終章では、より直接的な史料の残されているエペイロスの事例について検討し、伝説受容についての理解を深めたいと考える。

① エトルリアのヴィラノーヴァ期、東方化期については M. Pallottini

(2005)

no. *The Etruscans*, London, 1974, pp. 37-63. (以下 Pallottino, *Etrus-*

② Hdt. 1. 94.



②⑧ Ir. 507 (Rose); *Plut. Mor.* 294D.

②⑨ *Lycoph. Alex.* 805f. やらた(じ)のリユコフロンに對する古註では、「オデュッセウスは、エトルリア人のもとで放浪者の意を表すナノス(Nanos)とちがひ名で呼ばれてゐる」と伝えられてゐる(一二四三行に對する古註。E. Scheer, *Lycophronis Alexandra*, vol. 2, Berlin, 1958に拠る)。詳細は不明だが、エトルリアに何らかの土着の崇拜對象が存在し、それとオデュッセウスが同一視されたのかもしれない。

(K. O. Müller, *Die Etrusker*, Bd. 2, Stuttgart, 1965, S. 281ff.)

③⑩ 第一章註②参照。

③⑪ *Servius ad Aen.* 10, 167.

③⑫ *LINC s. v.* Odysseus, no. 50; s. v. Uluze, no. 60.

③⑬ *Plut. Mor.* 316A. 「オデュッセウスとキルケの子テレゴノスは、父を探し求めて送り出されたとき、農夫たちが花冠を被って踊つてゐるのを目にしたら、そこで都市を創建するよう(アポロンの神託によつて)告げられた。テレゴノスはイタリアのある場所に着き、農夫たちがトキワカシ(prinos)の小枝でできた花冠を被り、踊りを楽しんでゐるのを目にして、そこで都市を創建し、偶然の一致から

(prinos)から)プリニストウムと名づけたのであったが、その呼び名が変化してローマ人はブラエネステと呼んでゐるのである。(以下略)』

③⑭ *Ov. Fast.* 3, 92. Cf. *Hor. Epod.* 1, 29ff.

③⑮ *Dion. Hal.* 4, 45, 1.

③⑯ *Liv.* 1, 49, 9.

③⑰ *LINC s. v.* Odysseus, no. 4, 8.

③⑱ W. Schulze, *Zur Geschichte lateinischer Eigennamen*, Berlin, 1904, S. 201.

③⑲ *Diod. Sic.* 7, 5, 9. Cf. Aulierius Victor, *Origo Gentis Romanae* 17, 6.

③⑳ E. T. Salmon, *The Making of Roman Italy*, New York, 1982, p. 9ff.

23ff.

④① フェリウス家について R. M. Ogilvie, *op. cit.*, p. 423ff.

④② M. Christofani, *Etruschi. Cultura e società*, Rome, 1979, p. 30.

④③ *Paus.* 5, 12, 5. アリムネ王の年代については平田隆一『エトルスキ国制の研究』一三五頁以下。

### 第三章 エペイロスにおける英雄の受容

#### 第一節 周辺世界としてのエペイロス

二千年紀後半から一千年紀初頭にかけての民族大移動が終わるころ、バルカン半島を南北に貫くピンドス山脈の西側から、アドリア海沿岸に渡る地域に定着したのが、エペイロス人である。その生業は農業よりも牧畜、とくに移動放牧の比

重が高く、いくつもの部族に分かれて政治的・社会的発展はゆるやかであったが、交易によって富を蓄積した王や貴族を中心として部族ごとに統合を進め、ポリスとは性格の異なる部族国家を成立させた<sup>①</sup>。ストラボンによれば一四ほどの部族が記録されており、当初有名な神託所のあるドドナを勢力下に置いて支配的であった部族が、『オデュッセイア』でも言及されているテスプロティスであるが、のち最も有力となってくるのが内陸に位置するモロツソスである。

エペイロス沿岸部にケルキュラなどのギリシア植民市が建設された八世紀後半から六世紀、植民市との交易を通じ、エペイロスは直接にギリシアからの文化的影響を受けるようになり、エペイロス南部ではギリシア語が用いられていたことが碑文などから確認される<sup>③</sup>。しかし全ての住民がギリシア語を用いていたわけではないようで、イリュリア語も使われており、装飾品などの出土物から見て、特に生活様式の面ではイリュリア、トラキア、マケドニアなどバルカン諸民族との共通性が認められている<sup>④</sup>。このことからエペイロスは、北方のバルカン諸民族と南方のギリシア文化圏との狭間に存在していたと言及できよう。そして実際に先進のポリス市民にとっても、エペイロスの住民はギリシア人とバルパロイの境界に位置する非常にあいまいな存在であったらしい。というのは、エペイロスの住民がときにギリシア人として捉えられていたことを示唆するヘロドトスの記述に対し、トゥキュディデスは、ペロポネソス戦争が勃発して間もなく（四二九年）、アンブラキアと共同して参戦したエペイロス諸部族を、バルパロイと言及しているのである<sup>⑤</sup>。

六世紀中頃に成立した『テレゴニア』では、テスプロティス王家の血統とオデュッセウスが結びつけられているのを、すでに第一章において見てきたが、テスプロティス人自身がどの程度そういった伝説を受け容れ積極的に主張していたかは、以後全く史料が存在しないため、残念ながらわからない。一方、テスプロティスに代わって有力となってくるモロツソス王家は、のちの史料によるとアキレウスの血統に遡ると伝えられる。アキレウス自身はトロイア戦争において戦死するが、その息子ネオプトレモスがトロイア戦争後にエペイロスへとやってきて、モロツソス王家の祖となったというのである。『オデュッセイア』では、ネオプトレモスは本来の故郷テッサリアに帰還し、まだモロツソスの言及はないが、

ホメロスに少し遅れて成立した『ホストイ』においては、ネオプトレモスがモロツソスを訪れたとされている。Malkinは、オデュッセウスを崇拜するテスプロティスに対抗し、モロツソスがアキレウスの血統をすでに七世紀に採用したのだと主張するが<sup>⑦</sup>、モロツソス人自身がこの時期どれほど積極的にその伝説を主張していたのか、明確な証拠はない。

さらに史料を辿っていくと、五世紀前半テバイのピンダロスが、「ネオプトレモスは遠く広がる陸地を支配していた、そこでは、牧草地のある山がそびえ立ち、ドドナからはじまってイオニア海へと延びているのだ」、「(ネオプトレモスは)モロツソスにおいてわずかな間しか王として支配しなかったが、その血統の者が絶えず王権を担っている」と歌っている<sup>⑧</sup>。ピンダロスは、モロツソス王からプロクセノスの資格を与えられていたと考えられ、とすればモロツソスからの直接の情報にも接しえたであろうから、この頃にはモロツソス王家が伝説を主張していたことが窺える。さらに四世紀に入ってからモロツソスの王族が、叙事詩の英雄、なかでもアキレウスに関連する英雄の名を名乗り始めることから、伝説の積極的な受容が認められるようになる。以下では、このモロツソスの伝説受容に焦点を絞り、受容の画期がどこにあり、その背景がいかなるものであったのかを考察することとしたい。

## 第二節 モロツソスにおける受容の背景

ピンダロス以後では、まず四二〇年代に上演されたアテナイのエウリピデスの悲劇『アンドロマケ』の終末において、モロツソス王家の起源がネオプトレモ스에遡ることが述べられている。

「また捕われの女、つまりアンドロマケのことですが、モロツソスの地を居と定め、結婚によってヘレノスと結びつきます。また、アイアコスの血を受け継ぐ者としてただ一人残ったこの子供も母とともに。この子(ネオプトレモスとアンドロマケの子)をはじめとして、モロツソスの王は代々繁栄していくことでしょう。」<sup>⑩</sup>

トロイア陥落の後、功のあったネオプトレモスは、トロイアの勇将ヘクトルの妻アンドロマケと、トロイアの将ヘレノ

スを捕虜とし、モロッソスへと渡ったとされる。ネオプトレモスとアンドロマケの間に生まれたのがモロッソス王家の祖で、ネオプトレモスの死後に今度はヘレノスとアンドロマケが結婚することとなる。モロッソスの北に位置するカオネス人の王家は、このヘレノスの血統であるとされていた。<sup>⑩</sup> マケドニア王家と縁戚関係をもったモロッソス王家は、アレクサンドロス大王を最高指揮官とする軍事同盟の形でエペイロスを統一することとなるが、<sup>⑪</sup> のちのユステイヌス、パウサニアスといった史料では、「その地域での最初の王国はモロッソス」であり、「ピュロス（ネオプトレモスの別名）はプリアモスの息子ヘレノスに：カオネス人の王国とヘクトルの妻アンドロマケを与えた」<sup>⑫</sup> のであって、「ヘレノスは死に際してピュロスの子モロッソスに（カオネスの）支配権を委ねた」と伝えられるごとく、モロッソス中心の伝説形成が確認される。これらは、モロッソス人自身の直接の記録ではないけれども、このモロッソス中心の伝説はその王家の主張を反映していると見て疑いない。

では、その伝説受容の画期はどこにあるのだろうか。それを以下に検討していこう。まず注目されるのは、モロッソス王家の起源を述べた『アンドロマケ』が、実際にモロッソスで四二〇年代に上演されたと考えられることである。『アンドロマケ』は、古註によればアテナイで上演されたのではないと伝えられるため、上演地としてアテナイと同盟関係にあったアルゴスなどが考えられてきたが、結末部分でモロッソス王家の由来が述べられていること、この時期、すなわちペロポネソス戦争初期にギリシア北西部がアテナイとスパルタの争いの焦点となっていたため、アテナイが戦略的意図からエペイロス地方に関心を抱いていたことから、友好関係を築く意図のもとモロッソスで上演された<sup>⑬</sup> と考える方が説得的である。またモロッソス王タリュプスはアテナイで教育を受けたと伝えられるが、<sup>⑭</sup> 彼がアテナイに滞在していたのは同時期の四二〇年代、遅くとも四一〇年代であったと考えられる。というのは、四二九年、アテナイの支配下にあったアカルニアに対してアンプラキアとエペイロス諸部族が共同して出兵したとき、タリュプスは幼少で、後見人が軍を指揮していたとされるからである。<sup>⑮</sup> このタリュプスにはアテナイ市民権も付与されたということが、碑文から確認される。<sup>⑯</sup> Hal-

プロトは、四二九年以降エペイロス諸部族の戦略的重要性を感じたアテナイが、エペイロスとの友好関係を築くことを意図し、その一環がタリュプスのアテナイ滞在と彼への市民権付与であったと推測するが、四二六年にアテナイが將軍デモステネスを派遣してアンブラキアを攻撃した際、前回アンブラキアと協力したエペイロス軍が参戦していないことは確かに示唆的である。

プルタルコスによれば、その後帰国したタリュプスは、「ギリシアの慣習と文字、慈悲深い法によつて都市を秩序づけ、名声を得た」のだという<sup>②①</sup>。プルタルコスの叙述において注目されるのは、ネオプトレモスによるモロッソス建国のあとに続く王たちは単に「バルバロイのように野蛮」と述べられるのみで、タリュプスの事績へと記述が進んでいることで、これはいかにタリュプスの治世がモロッソスの転換点として重要であったかを示している。そのタリュプスがアテナイへと送られたであろう時期に上演された『アンドロマケ』が、モロッソス王家の起源を題材としているのは偶然ではあるまい。ギリシアの諸ポリス間の争いに参加して、ギリシア世界における自己の位置づけを必要としたモロッソスは、このアキレウスに遡る王家の血統によつて、ギリシア世界におけるアイデンティティを再確認したのである<sup>②②</sup>。

ギリシア人とバルバロイの境界に位置していた人々が、ギリシア世界に属することを強く求めた例として、オリュンピア競技への参加を求めたマケドニア王の例が挙げられるが、もちろん、周辺世界の共同体全てがギリシア世界とのつながりを強く求めたわけではない。ヘロドトスによれば、黒海沿岸に居住するギリシア人はスキュタイ人の起源をギリシアの英雄ヘラクレスに遡つて説明していたという。ところが、スキュタイ人自身はタルギタオスという人物から発する独自の起源伝承を語り継いでおり、ギリシア人の説明を受け容れはしなかった<sup>②③</sup>。そしてヘロドトスは、「スキュタイ人は異国の慣習を受け容れることをひどく嫌い、どの国についてもそうなのだが、特にギリシアの慣習を嫌う」として、ギリシアの慣習を取り入れたがために処罰を与えられたスキュタイ人について述べている<sup>②④</sup>。

こうした対照によつて、モロッソス側の意図がより鮮明に浮き彫りとなるであろう。バルカン諸民族とギリシアの狭間

に位置していたエペイロスは、ペロポネソス戦争への参加を契機に、ギリシアの英雄伝説によってギリシア世界に属することを強く意識したのであり、またそのようにして太古にまで遡ってギリシアと自己とを関連づけることは、ギリシア文化の導入を促進する背景ともなったであろう。『ノストイ』やピンダロスに見られるように、エペイロスではおそらくそれ以前から伝説自体は流布していたのであろうが、ギリシア世界でのアイデンティティの確認、ギリシア文化導入と密接に結びついたこの時期こそ、モロッコスが伝説を能動的に受容する画期だったたのである。

- ① Hammond, *Epirus*, Part 2-3.  
 ② Str. 7. 323-324. Cf Hammond, *Epirus*, pp. 443-479.  
 ③ P. Cahanes, "Frontières et recouvertes de civilisations dans la Grèce du Nord Ouest", *Ktema* 4, 1979, p. 196. Cf Hdt. 4. 33; Paus. 10. 12. 10.  
 ④ Hammond, *Epirus*, p. 428f., 436ff.  
 ⑤ Hdt. 4. 33; 6. 127; Thuc. 2. 80-81.  
 ⑥ *Od.* 3. 188ff.; 4. 3-9.  
 ⑦ Malkin, *Returns*, p. 137.  
 ⑧ *Pind. Nem.* 4. 51-54, 7. 38-40.  
 ⑨ Hammond, *Epirus*, p. 490. プロタセノスは、ある国から資格を与えられ、その国からさかづけるべき世話を担った者のこと、名譽ある資格でもあった。  
 ⑩ Eur. *Andr.* 1243-49.  
 ⑪ *FGH* 115 F355.  
 ⑫ アレクサンドロスの死後、ピュロソス王（在位三〇六—三〇二、二一九—二一七）の息子ピロソスは最盛期を迎えるが、以後相次ぐ戦争に疲弊し衰退する。一三三三年頃、共和政原理に基づくエペイロス連邦が成立するが、一六七年にローマに敗れて連邦は瓦解した。  
 ⑬ Just. *Ephr.* 17. 3. 1-9.  
 ⑭ Paus. 1. 11. 1-2.  
 ⑮ 四四五行の対句を中註。E. Schwartz, *Scholae in Euripidem*, vol. 2, Berlin, 1966, 266。  
 ⑯ D. S. Robertson, "Euripides and Tharyps", *CR* 37, 1923, pp. 58-60.  
 ⑰ Just. *Ephr.* 17. 3. 10-15.  
 ⑱ Thuc. 2. 80.  
 ⑲ M.N. Tod, *Greek Historical Inscriptions*, vol. 2, Oxford, 1948, no. 173.  
 ⑳ Hammond, *Epirus*, p. 507.  
 ㉑ Plat. *Pyth.* 1. 3-4. Cf. Just. *Ephr.* 17. 3. 10-15.  
 ㉒ タリヤソスの孫（ネキアポレモス王、在位三〇〇—二六〇）からマキレウスと関わる英雄の名を名乗る例が確認される。もともと、先進邦リスにさかづける英雄の名を名乗る慣習はなかつた。M.P. Nilsson, *Cults, Myths, Oracles and Politics in Ancient Greece*, New York, 1972, p. 108.  
 ㉓ Hdt. 5. 22. Cf. Hdt. 8. 137-9; W. W. How and J. Wells, *A Commentary on Herodotus*, vol. 2, 1912, p. 8. ヘルムンローニウスのトマシュニ

アの位置については、E. Hall, *op. cit.*, p. 179f.

②④ Hdt. 4. 5-10. スキュタイの起源伝承についての詳しい分析は、H.

Hartog, *The Mirror of Herodotus*, Berkeley, 1988, pp. 19-30.

②⑤ Hdt. 4. 76-80.

## おわりに

最後に、これまでの考察を振り返ったうえで、残された課題と展望を示すこととしよう。

本稿では、英雄伝説の機能を、ギリシアと周辺世界との関わりという広い視野から読み解くことを目指した。そしてまず、英雄と異民族とを結びつけることが、ギリシア人と周辺世界の諸民族とが本格的に接触した植民時代において、外延に広がる新しい世界を自身の世界認識のなかに秩序づける試みであったことを示した。そこには、対等の立場で異民族を理解しようとしたギリシア人の姿勢があつたのである。

次に、周辺世界側の受容について検討したが、従来の研究では以下のような問題点があつた。すなわち Bickerman は、ギリシア側の説明こそが権威を持つていたためだという短絡的な見方に終始し、一方、ギリシアの伝説によつて異民族にエスニシテイが与えられたのだとした Malin の主張は、ギリシア側の史料を不用意に用いた解釈に過ぎなかつた。それはまた、エトルリア固有の言語や宗教など、エスニシテイを規定する他の要素をあまりに軽視しているといえよう。エペイロスでも、ギリシア側の史料を即伝説受容、エスニシテイに結びつけることはできないのであり、五世紀後半に至つてからのモロツソスにおける積極的受容の意味が見過ごされることとなつていた。以上のように、従来の研究では、ギリシアの伝説を受け容れなかつたスキュタイに対して、エトルリア、エペイロスにおいて、誰がどのような意味を見出して受容したのか、という能動的側面は見過ごされ、受容の背景が十分に明らかにされてこなかつたのであつた。そこで本稿では、以下のように論じた。エトルリア・ラティウムにおいて、都市の創建者として、あるいは一族の祖としてギリシアの英雄が受容された背景には、七〜六世紀に優れた先進文化に接したとき、王侯貴族がギリシアとの関わりのなかで自己の

新たなアイデンティティを規定する意味があったのである。また、北方のバルカン諸民族と南方のギリシア世界との狭間に存在していたエペイロスのモロツソス王家は、五世紀後半のペロポネソス戦争への参加を契機に、アキレウスへと王家の起源を遡る伝説の積極的な受容によって、ギリシア世界に属すアイデンティティを確認したということを示した。さらに、エトルリア・ラティウム、エペイロスに共通して指摘できるのは、以下のことである。すなわち、ギリシアの英雄伝説のなかに自己の起源を遡り、太古からのギリシアとの結びつきを強調することは、自己をギリシア文化の正統な継承者として認識することにつながる<sup>①</sup>。そうした伝説受容の意義は、エトルリア・ラティウム、エペイロス、さらにはローマへと、ギリシア文化が深く浸透し受け継がれていった要因として、重要なものであろう。

とはいえ、周辺世界の側における伝説受容の具体像の把握には、依然として残された問題が多いのも事実である。本稿では王や貴族を受容の主体として捉えたが、住民全体にどの程度伝説が浸透していたのかといった問題については、深くふみ込むことができなかったであり、周辺世界側の社会の実態についてより理解を深めたいうえで、さらなる考察が加えられねばならないであろう。また、本稿において取り上げた地域は非常に限定されたものであり、特にマケドニアやローマについては、ほとんどふれることができなかった。今後こうした地域をも視野に入れ、時間的にも考察の幅を広げることによって、研究の深化を図ることが必要とされる。そして、以上のような周辺世界への関心は、必然的にギリシアそのものをめぐる問題へと回帰することにもなる。本稿ではエスニシティを正面から取り上げて論じることはなかったが、ギリシア人の民族意識形成とその推移を、より具体的に把握することも忘れてはならないであろう。こうした点を今後の課題と展望として、本稿を締め括ることとしたい。

① こうした捉え方について、以下のような人類学の成果が示唆的である。ソロモン諸島・マイタ島では、土着文化と新しい外来の文化（キリスト教文化）との間で諸矛盾・軋轢が生じたとき、自分たちの起源

を異文化の枠組みの中に遡り、位置づけることで解決を試みた事例が報告されている。すなわち土着住民は、自らの起源が聖書に記されたイスラエルの二支族に遡るといふ伝説を生み出し、十戒の形式をと

って古来よりの規範を成文化したのだと云ふ。R.M. Keesing, "Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific", *Contemporary Pacific* 1, 1989, pp. 19-42; B. Burt, "Kasom, Christianity and the First Ancestor of the Kwar'ae of Malaita" in: R. Keesing and R. Tonkinson (eds.), *Renventing Traditional Culture*.

*The Politics of Kasom in Island Melanesia* (Mankind Special Issue 13-4), 1982, pp. 374-399. #たE. Traube にては、外来者の土着化プロセスの分析 (E. Traube, *Cosmology and Social Life: Ritual Exchange among the Mambai of East Timor*, London, 1986) を参照せよ。

(京都大学大学院博士課程

)

# The Adoption of Hero Myth in the Periphery of Ancient Greece

by

SHOJI Daisuke

Ancient Greeks explained the origins of the barbarians in the periphery of Greece by Greek hero myths, and some heroes were worshipped by the barbarians. This paper examines the meaning of the creation and acceptance of such myths.

From the 8th century B. C. on, Greeks colonized the coasts all over the Mediterranean Sea. Greeks explored the new lands and encountered many barbarians, and articulated their origins with Greek heroes. That is, Greeks conceptualized the new lands and the barbarians in the framework of hero myth that formed the Greek view of the world.

Etruscans in Italy traded with Greeks and introduced Greek culture willingly especially between the 7th and 6th centuries B. C., and Latium was also influenced by Greek culture through Etruria. In these areas, some kings or aristocrats accepted the Greek hero Odysseus as the founder of their cities, or they regarded themselves as descendants of Odysseus. By the adoption, they defined their new identity in relation to Greece.

The people of Epirus in the northeast of Greece were considered to be barbarians by the Greek polis dwellers. But the Molossians of Epirus participated in the Peloponnesian War in the latter half of the 5th century B. C. and they keenly realized the necessity to define their identity in the Greek world. Therefore, the royal family of the Molossians actively claimed themselves to be descendants of the Greek hero Achilles and confirmed their identity as belonging to Greek world.

Such acceptance of the Greek hero myth intensified the relation to Greece and promoted the introduction of Greek Culture. That meaning of the hero myth is the important factor in understanding why Greek culture penetrated deeply into Etruria and Latium, Epirus, moreover Rome.